

〔武藏國隅田川考〕按に此太井を東鑑に大井とかきて、おほむと點を下せしは誤ならん、ふとも亦川の名をかきたがへたりと見ゆ、ふるくより武藏下總の境ひなる、ふとる川と見えたり、是もなり、太井川は全く下總の國と見ゆ、さればこゝにいふ太井川は隅田川の誤りなるべし、是によりておもふに、かの孝標が女の、みちのくよりこなたに來る路すがら、案内の者のいふにまかせて、隅田川を太井川とおもひ、多磨川を隅田川とするせしなるべし、友人凸凹居^{○政孝}_{三島}の説に、更級日記に載る所をおもふに、太井川はもとより、たがふにあらずして、この比その隅田川は、海のごとく川は、も廣かりしかば、品川の入海なりと思ひうちすぎ、隅田川の沙汰におよばざりしならんと、さもありしにや、義經にも、ふとる隅田^{（さんだ）}うち渡りしよし見えたり、古へ隅田川の東に、太井川といふありして、世に名高き川としこゆれど、今はその名を玄る人もまれなり、葛飾名所記に、利根川の末を葛飾の郡にて、かつしか川といふ、又太井川とも文卷川ともいへり、眞間の岸の邊をからめき川ともいふ、則今の市川なり、俗に坂東太郎といふ是なりと、是によれば、隅田川とは大にへだりて、全く下總の國のうちなり。

〔義經記三〕よりもむほんの事

ちせう四年九月十一日、むさしとしもつさのさかいなる、まつどのしやう、いち河といふ所に付

給ふ
○下略
武藏國隅田川渡條

〔武藏國隅田川考〕按に、市川を武藏下總の境とするは、誤れるなるべし、近き世にこそかく定りぬれど、古くより隅田川を兩國の境とせしことは、論すべくもなし。

○按ズルニ、義經記ニ謂ユルいち河ハ、即チ吾妻鏡ニ見エタル太井河ナルベシ、猶ホ前後引ク所ノ江戸名所圖會、相馬日記等ヲ參看スベシ、